

翻訳の不確定性と意味の懷疑論

鈴木貴之

「地球は丸い」とか「日本の経済システムは根本的な改革を必要としている」などといった日本語の文を英語に翻訳するとき、修辞的な観点を別にすれば、その翻訳が一通りに定まるとは自然なことであろう。しかしクワインによれば、原理的にはそれらをそれぞれ別個の二つの英語の文に翻訳することができ、しかも二つの翻訳は同程度にうまくいくという。これがクワインの翻訳の不確定性テーマの主張することである。このようなことは本当にあり得るのだろうか。そして、もしこのテーマが正しいのならば、我々の言語実践にとつて深刻な帰結がもたらされることはないのだろうか。

翻訳の不確定性テーマに関しては、その重要性ゆえにさまざま議論がなされてきたが、その妥当性をめぐる議論は今日まで続いており、また、その哲学的含意は十分に明らかにされているとは言い難い。このような現状の一つ因は、クワインも認めるように不確定性の実例を提示することが困難であり、それゆえ不確定性の具体的なイメージを持ちにくいということにあるだろう。本論文は、翻訳の不確定性に対するいくつかの反論を検討することを手がかりにして、不確定性のいくつかの簡単なモデルを示しながら、翻訳の不確定性の内実とその哲学的含意を明らかにしようという試みである。

一 根元的翻訳の概要

まずは根元的翻訳がどのように進行するかを、簡単に概観しよう (cf. Quine 1960, Chapter 2)。言語学者あるいは人類学者が、ある未開人の集落を訪れる。彼の手元には、その未開人の言語に関する資料は一切ない。このような状況で、彼はいかにして現地語を自国語に翻訳することができるか。このような課題は、クワインによつて根元的翻訳と名付けられる。この根元的翻訳という思考実験によつて、言語や意味がどこまで客観的な証拠に基づいたものであるのかを明らかにしようというのがクワインの意図である。

現地語に関する知識を一切持たない言語学者にとってのデータは、現地人がどのような状況でどのような音を発するか、あるいはどのようなふるまいを見せるかということのみである。クワインはまず、現地人のふるまいのうち、肯定と否定の身振りを特定することが第一の作業仮説になると考へる。この作業仮説のもとで、現地人が発している音、すなわちさまざまな文の中で、場面文と定常文を区別することができる根元的翻訳の出発点となる。場面文とは、現地人がある状況の下でのみ肯定または否定する文で、「ウサギがいる」とか、「雨が降っている」というようなものである。これに対して定常文とは、現地人がどのような状況の下でも肯定または否定するもので、「雪は白い」とか、「ウサギは動物である」というようなものである。

根元的翻訳は場面文の翻訳から始まる。たとえば、言語学者が自国語の「ウサギがいる」という文に同意するような状況においてのみ、現地人が同意するような文が見つかれば、それを自国語の「ウサギがいる」という文に翻訳することができるのである。ここでクワインは、状況ということをより厳密に考へるために、刺激意味という概念を導入する。刺激意味とは、その刺激のもとである文を肯定する刺激の集合と、否定する刺激の集合の組からなるものである。たとえば「ウサギがいる」の場合には、肯定的刺激意味としては、ウサギから受けざまざまな視

観的刺激が含まれ、否定的刺激意味としては、ウサギがないときの視覚的刺激などが含まれることになる⁽¹⁾。

もし、言語学者が十分に観察を繰り返すならば、場面文に関しては自国語の文と現地語の文の組を手にすることができるだろう⁽²⁾。しかし、定常文に関しては同じようにはいかない。なぜならば、定常文は状況に関わらず常に肯定または否定される文であるから、それぞれの状況の下での肯定・否定を基準に個々の定常文を区別することはできないからである。つまり、定常文に対しては、刺激意味という概念はうまく機能しないのである。

したがって、これまでのデータをもとに定常文の翻訳に進むためには、さらなる作業仮説が必要となる。この作業仮説は分析仮説と呼ばれ、具体的には、場面文をどのような仕方で語に分節化していくかを内容としている。この分析仮説に基づいて、定常文の中に場面文と共通の語を見つけだし、それをもとに定常文同士の翻訳を進めしていくのである。もちろん、ここで得られた翻訳は現地人に対してさまざまな文を発話してみると、その正しさがチェックされるのだが、ここでチェックされるのは分析仮説ではなくそれをもとに作られた文であるため、分析仮説に基づいて翻訳を進める過程では、現地人の言語行動という証拠による検証を越えて翻訳が進められることがあるのである。

二 二つの不確定性

しかし、以上のような根元的翻訳の過程は、現地語の自国語への翻訳を一義的に確定するものではない。そこには、次のような二つの不確定性の可能性が見られるのである⁽³⁾。

第一の不確定性は、指示の不可測性と呼ばれるもので、場面文に関してすでに問題になるものである。上で見たように、場面文に関しては、刺激意味の同一性を手がかりにして現地語の文とそれに対応する自国語の文を見つけることができるのだが、ある現地語の文に対応する自国語の文の候補は実は一つではない。たとえば「ガバガイ」

という現地語の文と、日本語の「ウサギがいる」という文の刺激意味が等しいとしよう。ここで、現地人がウサギに関して日本人と同様の個体化を行つてゐるとは限らないことが問題になる。つまり、日の前にいる（日本語でいう）一匹のウサギを、現地人はすべてのウサギからなる一つのウサギフュージョンの部分と見るかもしれないし、単なるウサギの時空的断片と見るかもしれない。これらの場合には、「ガバガイ」はそれぞれ「ウサギフュージョンの部分がある」、「ウサギの時空断片がある」という文に翻訳されることになる。そして、同一性を表す述語などの、個体化に関する語彙の翻訳を適当に調整すれば、いずれの翻訳の仕方でも現地語を体系的に翻訳することができるのである。指示の不可測性から翻訳の不確定性を導く議論を、クワインは後に「下からの議論」と呼んでいる (Quine 1970)。

指示の不可測性は、それを原理的に排除できないとしても、翻訳の内実をそれほど大きく変えるものではないかもしれません。これに対しても、第二の不確定性、つまり狭義の翻訳の不確定性は、翻訳により深刻な問題をもたらすようと思われる⁽⁴⁾。

狭義の翻訳の不確定性が生じるのは、定常文の翻訳においてである。上で見たように、定常文の翻訳に関しては刺激意味を手がかりにして、それぞれの定常文を個別化することはできない。したがつて、ここでは分析仮説を手がかりにして翻訳を進めざるを得ない。分析仮説は、翻訳の確定している場面文を構成要素に分解し、構成要素間の翻訳関係を確定してゆく。このようにして得られた單語対單語の「辞書」を今度は定常文の翻訳において利用すれば、定常文のある程度の個別化が可能になる。しかし、これだけでは定常文の翻訳を確定させるには不十分であろう。なぜならば、定常文の中にはこのようにして得られた「辞書」に含まれる單語とそうでない單語とともに含む文や、辞書に含まれない单語のみからなる文もあるだろうが、これまでに得られた証拠からはこれらの文の間の個別化は依然として不可能であるからである。翻訳の不確定性が成立するのは、まさにこののような状況においてで

ある。このような状況では、自国語の文の總体と、現地語の文の總体を、複数の仕方で両者の発話傾向と整合的に対応づけることが可能であるようと思われるるのである⁽⁵⁾。

しかし、この議論はいささか単純に過ぎるように思われる。なぜならば、定常文を個別化するための材料はこれだけではないからである。たとえば、「参政権は基本的人権である」と「言論の自由は基本的人権である」はどちらもどのような非言語的刺激を伴つて質問されても、常に肯定される定常文であろう。しかし、「どうして出版物の検閲は禁じられているのか?」というような言語的刺激は（あるいは、そのような言語刺激と「言論の自由は基本的人権であるから?」というような言語的刺激の組み合わせは）、後者の肯定のみを促すだろう。言語的な刺激もある意味では物理的刺激の一種なのであるから、「発話の傾向性」という表現は、非言語的な刺激に促される発話の傾向性だけではなく、相手の発話に促される発話の傾向性も含んだものと考えるべきであろう⁽⁶⁾。以下では「発話の傾向性」という語をこのような広い意味で用いることにしよう。このように、刺激意味として言語的刺激をも考慮に入れるならば、定常文に関してもかなりの個別化が可能になるだろう。

さて、クワインの定式化によれば、翻訳の不確定性とは、「ある言語を他の言語に翻訳するマニュアルを、発話の傾向性の總体と両立するが、相互に両立不可能であるような仕方でさまざまにつくることができる（Quine 1960, p. 27）」ということである。しかし、ここに現れるいくつかの概念の内実を明らかにしない限り、この定式化は、翻訳の不確定性とはどのようなものであるかを明らかにしてくれないだろう。したがって、まずはこの定式化をもう少し詳しく検討しよう。

最初に、複数のマニュアルの両立不可能性とはどのようなことであるかを押さえておこう。『ノンとばと対象』の時点では、クワインはこの両立不可能性を明確に特徴づけていなかつたように思われるが、『真理の探究』においては、両立不可能性とは、二つのマニュアルを交互に用いたときにスムーズなコミュニケーションが成立しなくなること

である」と明確に述べてゐる (Quine 1992, p. 48)。」これが何をいわんとしているかは、クワインがいう意味では両立不可能ではない一つのマニュアルとはどのようないふものかを考えてみればよい。それはすなわち、二つのマニュアルの間の違いが表現の違いに過ぎず、両者がパラフレーズの関係にあるような場合である。つまり、ある文を第一のマニュアルで翻訳した場合には日常的な簡潔な表現になるが、第二のマニュアルで翻訳すると文学的で修飾的な表現になる、というような場合である。」のような場合には、二つのマニュアルを交互に用いたとしても、会話はやや不自然になるものの、深刻なコミュニケーションの不全が生じるわけではない。

では、それに対して、両立不可能なマニュアルとはどのようなものだろうか。例として、簡単すぎるかもしけないが、次のような状況を考えてみよう。現地語の文 s_1, s_2, s_3, s_4 に対し、自国語の文 j_1, j_2, j_3, j_4 が翻訳の候補になつていて、さらに現地語においては s_1 に対し s_2 を発話し、 s_3 に対し s_4 を発話することが自然であり、自国語においては j_1 に対し j_2 を発話し、 j_3 に対し j_4 を発話することが自然であるとしよう。ここで、マニュアル M_1 によれば、現地語の四つの文は順に j_1, j_2, j_3, j_4 に翻訳され、 M_2 によれば、 j_3, j_4, j_1, j_2 に翻訳されるとすれば、どちらのマニュアルによつても個々の局面でのコミュニケーションの自然さは保たれることになる。言い換えれば、どちらのマニュアルを用いても現地語のある発話を対して現地語のどの文を返すかという点では、変わりがない。このように、あるマニュアルが自国語の自然な会話を現地語の自然な会話に翻訳することを可能にするということが、そのマニュアルが発話の傾向性の総体と両立するということにほかならない(7)。しかし、ここで二つのマニュアルを交互に用いるならば、次のようになる。現地人の発話 s_1 に対し M_1 にしたがつてこれを j_1 と翻訳し、 j_2 と返答すべきであることがわかる。そして j_2 を M_2 にしたがつて翻訳し s_3 を発話する。しかし、これは現地語における自然な返答ではない。つまり、一つのマニュアルがこのようないふ關係にあるときには、それらを交互に用いることは田滑なコミュニケーションの妨げとなるのである(8)。」のようなとき、二つのマニュアルは両立不可能である

といわれる所以である。

ここで、「現地語のある文が一つのマニュアルによつては自国語の真なる文に翻訳され、他のマニュアルでは偽なる文に翻訳される」という定義は、両立不可能性の定義として不正確である、ということに注意しておく必要がある⁽⁹⁾。もちろん、どのような良いマニュアルを用いても、現地人が我々にとつて偽である文のいくつかを肯定する、ということが帰結してしまった可能性はある。そしてそのような場合には、この定義で述べられるような状況になるだろう。しかし、複数のマニュアル間の関係は、ある現地語の文が日本語の真なる文のどれに翻訳されるかという点で異なるだけ、という可能性もある。したがつて、翻訳が不確定であるときに常にこの定義で述べられた状況が成り立つわけではないのである。このことを考えれば、現地語と自国語で陽子と中性子という二つの単語の翻訳を逆にしただけのマニュアルという例も、同程度に良いが両立不可能である二つのマニュアルの例としては不適切である。なぜならば、一方のマニュアルによればそれらの単語が登場する多くの文が正しくなり、他方によればそれら多くの文が偽であることになるからである。両立不可能な二つのマニュアルは、同じくらいに多くの文を真にするものでなければならないのである⁽¹⁰⁾。

ここまで考察で、翻訳の不確定性にかかるいくつかの概念を明らかにすることができた。しかし、翻訳の不確定性は本当に成り立つのだろか。上に述べたような説明だけでは、実際にどのような形で不確定性が生じるのかを理解するのは依然として難しいかもしれない。そこで、以下ではまず、クワインによる狭義の不確定性の論証と、それに対するいくつかの反論を検討し、翻訳の不確定性がいかなる形で生じうるのかを明らかにしよう。

三 「上からの議論」とその批判

クワインは、一九七〇年の論文「翻訳の不確定性の理由について」において、翻訳の不確定性の論証を試みてい

る。そこで論証として挙げられているのが、先に言及した「下からの議論」と、次に述べる「上からの議論」である。

カーケの定式化によれば、クワインの「上からの議論」とは、「物理理論がすべての可能なデータのもとで決定不全であるのと少なくとも同程度には、物理理論の翻訳も不確定になる」というものである (Kirk 1973, p. 195)。もう少し詳しく述べるならば、その主旨はつぎのようにまとめることができる。クワインによれば、一般に、理論は可能な経験の総体によって一義的には決定されない。この主張は、証拠に基づく理論の決定不全性テーゼと呼ばれる。いま、物理理論AとBがともにすべてのデータと両立可能である、すなわちデータをうまく説明・予測するが、我々はAの方が以前の理論とより類似しているというような何らかの理由で、Aの方を採用しているとしよう。ここで、現地人が十分に文明的であるならば、同様のデータと両立する何らかの物理理論を持つていると考えられる。このような場合に、我々が現地人の物理理論を翻訳するとするならば、我々は現地人の物理理論を理論Aとして翻訳しても、理論Bとして翻訳しても、現地人の理論はデータに合致していることになり、どちらのマニュアルも我々と現地人の発話の傾向性に合致することになるだろう。したがって、現地人の物理理論の翻訳に不確定性が生じるのである⁽¹¹⁾。

このようなクワインの「上からの議論」に対する批判として、まず第一にカーケの批判を検討しよう。クワインによれば、(指示の不可測性を別にすれば)場面文の翻訳は確定する。したがって、場面文に現れるような語彙によって物理理論を定義したり、説明したりする現地語の物理理論の「教科書」があつたならば、その中に見られる現地語の記述の中の、理論語以外の部分の翻訳は確定するはずである⁽¹²⁾。そして、この翻訳が確定した部分をもとにしで、現地語の物理理論の教科書と自国語の物理理論の教科書を照らし合わせれば、現地語の教科書が理論Aに関する

るものであるのか、Bに關するものであるのかも判定できるはずである。ここで、そもそも自國語の物理理論Aと物理理論Bの教科書の形式が全く同じであるために、現地語の教科書がどちらに対応するのかがわからない可能性もあるはずだ、となお反論することが可能かもしれない。しかし、もしAに關する教科書とBに關する教科書の形式が全く同じであるならば、それらは同じ理論を異なる表記法で述べているに過ぎず、そこには何ら興味深い不確定性は生じていないことになる、とカーケは批判するのである。

翻訳の不確定性を導くクワインの議論が先にのべたような内容に尽きるものならば、カーケの反論は妥当であるようと思われる。クワインの議論の問題点は、理論Aの概念と理論Bの概念がともに同じような形で我々の語彙の中に含まれている、ということを示唆している点であろう。証拠に対する理論の決定不全性とは、利用できるすべての証拠に基づいて我々がある理論を採用したとしても、それらの証拠を同程度にうまく説明する異なる理論が存在する可能性が常に残されているということである。しかし、多くの場合、我々が物理理論Aを採用するならば、我々は理論Bをそもそも思いついていないか、あるいは偽なるものとして退けているかのいずれかであろう。そして、このような状況では、特別な事情がない限り、現地人が真として受け入れている物理理論を翻訳するときには、それを我々が真として受け入れている物理理論に翻訳しなければならないだろう。したがって、現地語の物理理論を翻訳する候補として理論Aと理論Bの二つが同等のものとしてあるということ 자체が不自然な前提なのである(13)。

クワインが問題にすべき状況、すなわち翻訳の不確定性が生じる可能性のある状況とはむしろ、理論の決定不全性ゆえに、我々が理論Aを採用しているにもかかわらず、現地人は理論Bを採用し、その結果として両者の教科書に同型性が見出されない場合だろう。このような場合には、現地語の教科書に含まれるある理論語を、我々の理論のどの理論語として翻訳するかということに関しては、最良のマニュアルが一義的に決定されない可能性が生じる

のである⁽¹⁴⁾。

ここで、次のような反論が考えられよう。このような可能性を認めるのは、証拠に基づく理論の決定不全性を無条件に受け入れてはいるからに過ぎないのではないか、そして、証拠が同一であるならば、理論Aと理論Bは表記法を異にする二つの理論にしかなり得ないのではないか、その場合には結局、二つの理論の翻訳は確定するのではないか、という反論である。たしかに、上からの議論においては理論の（実質的な）決定不全性が成り立つことが前提とされている。そして、強い決定不全性テーゼが成り立たないならば、我々と現地人の経験が等しいならば、翻訳は確定するということになるだろう。しかし、たとえ決定不全性テーゼを受け入れないとしても、我々と現地人では証拠、すなわち経験の総体が違うために、両者の理論が（単なる表記法の違い以上に）異なり、それゆえに翻訳の不確定性が生じる、という可能性はなお残されている。このような場合には、我々と現地人の発話傾向に両立する、すなわち両者のそれなりにスムーズな会話を可能にする翻訳マニュアルが複数存在しうるのである⁽¹⁵⁾。

ただし、理論の決定不全性を経由する場合でもしない場合でも、翻訳の不確定性の直接の原因となつているのは、翻訳者と被翻訳者の理論、いいかえれば発話の傾向性に同型性が成り立たないことである、ということに注意しなければならない⁽¹⁶⁾。つまり、理論の決定不全性テーゼが成り立つ場合にも、それが我々と現地人の発話の傾向性の（形式的な）違いを産み出し、この発話傾向の違いが翻訳の不確定性を産み出すにすぎないのである。このことに注目すれば、結局「上からの議論」は、理論の決定不全性が成り立つならば、たとえ両者の経験が等しいとしても我々と現地人の発話の傾向性にも違いが生じ、それゆえに翻訳の不確定性が生じうる、ということを述べているに過ぎないことになる。したがって、理論の決定不全性に固有の翻訳の不確定性を示すということがクワインの意図であつたならば、上からの議論による論証は失敗しているということになるだろう。

第二に検討するのは、ベクテルによる批判である (Bechtel 1980, cf. 堀崎 1992)。まず、ベクテルの批判を簡単に紹介しよう。

クワインによれば、決定不全性テーゼで言及されている複数の理論は、経験の総体に同じようによく合致するという点で経験的に等値であるが、いかなる述語の再解釈によつてもそれらを論理的に等値にすることはできない。たとえば、ある物理理論Aと、そこにおける「電子」と「原子」という語をすべて入れ替えることによつて得られる物理理論Bというものを考えてみよう。たとえば、理論Aは「原子は電子と中性子からなる」という文を含むのに対し、理論Bは「電子は原子と中性子からなる」という文を含み、さまざまな場面文を説明する際にも、Aでは「電子が放出された」というところをBでは「原子が放出された」と説明する事になる。しかしそれらの違いにも関わらず、二つの理論はさまざまな場面文を同程度に説明し、予測することになるだろう。すなわち、理論Aと理論Bは経験の総体に同程度にうまく対処することを可能にするという点で、経験的に等値であるといえるだろう。しかし、この二つの理論においては、Bにおける「電子」を「原子」、「原子」を「電子」と読み替えることによりて、理論Aから理論Bを手に入れることができる。このような場合には、理論Aと理論Bは単に理論語の表記法が異なるに過ぎず、論理的に等値な一つの理論に他ならないことになるのである。クワインはこのような体系的な読み替えを「述語の再解釈」と呼ぶが、彼によれば、理論の決定不全性テーゼでいわれているような複数の理論の間には、このような再解釈が不可能でなければならないのである (Quine 1975, pp. 319-20)。

ところで、クワインによれば、翻訳が不確定であるとは、同じように発話の傾向性の総体と一致するが、相互に両立不可能な複数の翻訳マニコアルが存在するといふことにほかならない。いわゆる、このような二つの翻訳マニコアルをそれぞれ M_1 、 M_2 としよう。いま、現地語の文 s_1 が、 M_1 によつては理論Aに関する自国語の文 m'_1 に、 M_2 によつては理論Bに関する自国語の文 m'_2 に翻訳されるとするならば、二つのマニコアルを組み合わせる」とによつて、自

国語の二つの文 m_1 と m_2 を対応づけることができる。同様の手続きをそれぞれのマニュアルのすべての文に対して行なうならば、理論 A に含まれるすべての自国語の文に、理論 B に含まれるある自国語の文が対応することになる。これは結局、理論 A を理論 B によって再解釈している、あるいはその逆を行っていることにほかならない。したがって、理論 A と理論 B は表記法の違い程度の違いしか持たないことになり、理論の決定不全性に由来する翻訳の不確定性も何ら深刻なものではないことになる。これがベクテルの批判である(17)。

ベクテルの議論においてまず第一に問題であるのは、現地語の理論を翻訳する候補として、経験の總体に合致する理論 A と理論 B の二つを我々が持っているという、先に指摘したクワインの不適切な想定を、ベクテルがそのまま利用していることである。翻訳の不確定性は、我々の持つ理論と現地人の持つ理論が（表記法の違い以上の意味で）同型的でない場合に、両者の対応付けの仕方が一義的に定まるとは限らない、というモデルで考えるべきであつて、このモデルに対しても、ベクテルの議論はそのままの形では適用できないのである。

しかし、たとえ自国語に理論 A と理論 B の二つが存在すると想定したとしても、無条件に理論語の再解釈が可能になるわけではない。たとえば、次のような例を考えてみよう。観察される現象 p_1, \dots, p_6 （あるいはそれに対応する場面文）に対して、自国語の理論 A では法則 l_1 （を表現する定常文）によつて p_1, p_2, p_3 を説明し、法則 l_2 によつて p_4, p_5, p_6 を説明することが可能だが、理論 B では法則 k_1 によつて p_1, p_2, p_4 を、 k_2 によつて p_3, p_5, p_6 を説明することが可能であり、しかもいざれの理論も経験の總体を同程度によく説明するとしよう⁽¹⁸⁾。ここで、現地語の理論では p_1, p_2, p_5 （に対応する現地語の場面文）を法則 j_1 で、 p_1, p_4, p_6 を法則 j_2 で説明しているとするならば、現地語理論を理論 A に翻訳すると、 j_1 は l_1 、 j_2 は l_2 に対応づけられ、理論 B に翻訳すると、 j_1 は k_1 、 j_2 は k_2 に対応づけられることになるが、どちらの翻訳もコミュニケーションを同じ程度に円滑にする。具体的にいえば、どちらのマニュアルによつても、現地語の法則は我々にとつて偽である説明関係を一つだけ含むことになるのであ

る。ベクテルの議論にしたがえば、このような状況において、二つの翻訳マニュアルを組み合わせることで、 k_1 と l_1 、 k_2 と l_2 という再解釈関係が与えられることになる。しかし、理論Aの l_1 と理論Bの k_1 はそれぞれが説明する現象の一部が異なるのであるから、両者が単に表記法を異にするだけの法則でないことは明らかである。このような場合には、二つの翻訳マニュアルを組み合わせることで、二つの理論が実質的に同じものであることが示されるわけではなく、再解釈は成立しないのである。

以上の議論によって、次のことが示された。クワインの「上からの議論」には不適切な想定が含まれている。しかし、この想定を除外して考えれば、カーグとベクテルは、翻訳の不確定性がありえないという論証に成功しているとはいえないものである。

四 可能な不確定性とは

さて、翻訳の不確定性テーマと上からの議論に対する批判を以上のように検討した結果、不確定性が生じるとしたならばそれはどのような場合であるのかが明らかになってきたように思われる。

先にも述べたように、定常文の翻訳には全く手がかりがないわけではない。観察文と共通の語彙の翻訳は確定するし、どの観察文を刺激として発話されるかという意味での定常文の発話傾向も手がかりになる。また、カーグが指摘するように、定常文が科学理論について述べる文であるような場合には、理論語は観察文に現れる語彙によって定義的に導入されている場合も考えられるだろう。これらの手がかりを考慮に入れれば、定常文の翻訳も全く任意なものでないことは確かであろう。

では、それでも翻訳の不確定性が生じるのはどのような場合だろうか。それは、一言でいえば自国語と現地語の

発話の傾向性の総体が同型的でない場合であろう。クワインの言い方に従えば、我々が眞として受け入れている文の総体は（あるいはそれとともに偽として受け入れない文の総体も）一つの理論である。ここで、もし証拠に基づく理論の決定不全性テーゼが成立するならば、経験の総体に基づく理論の決定不全性、すなわち発話の傾向性の総体の決定不全性が帰結することになる。そして、このテーゼが、同じ程度によく経験に対処することを可能にするが、発話の傾向性の総体が同型的でない二つの言語体系すなわち理論の可能性を認めるような主張であるならば、同じ経験の総体を持つ者同士であっても、同型的でない発話の傾向性の総体を有する可能性があることになる。そのような場合には、自分とは異なる発話の傾向性を持つ者の文を自分の言語の文と一対一対応させる際に、最良の方法が一義的に定まる保証はない。翻訳の不確定性が生じるのはまさにこのような状況においてであろう。⁽¹⁹⁾

また、このような強い決定不全性テーゼを認めないとしても、すなわち、経験が同じならば発話の傾向性の総体も必ず同型的になると考へたとしても、経験の総体が顕著に異なるならば、発話の傾向性も顕著に異なり、それゆえそのような人の発話の翻訳にはやはり不確定性が生じる可能性がある。このような形での不確定性は、理論の決定不全性テーゼが否定されたとしてもなお、認めることができるものであろう⁽²⁰⁾。

しかし、我々の言語において実際に翻訳の不確定性が生じる可能性はあるのだろうか。クワイン本人は、現実の翻訳ではある一つの翻訳マニュアルがすでに定着しているために、現実の翻訳に不確定性を見出することは困難であると考えている。しかし、以下では、この問に対する答えがイエスであるというだけでなく、これまでの考察をもとに考えれば、我々の言語において現に翻訳の不確定性が生じていると考へることに何の不自然さもない、ということを示したい。

これまでの考察によれば、翻訳の不確定性が生じるのは、自国語と現地語で言語体系が同型的でない場合であつ

た。」などで、我々の言語に目を向けてみれば、それぞれの言語で概念の数が違い、それゆえ文と文の間の関係も異なり、その結果文と文の間に一対一対応が成立しない、ところの「自然に観察される事実ではないだろうか。たとえば英語における定常文 “His belief is firm.” と “His creed is firm.” 日本語における定常文 「彼の信念は強固だ。」と「彼の信条は強固だ。」のような文を翻訳する状況を考えてみよ。」など、四つの英語の場面文A、B、C、Dに対しても、英語ではAとBに対しては “His belief is firm.” CとDに対しては “His creed is firm.” が強く結びつく（たとえば前者を聞いたときに後者が発話される）のに対し、日本語ではAと同じ対しては「彼の信念は強固だ。」BとDに対しては「彼の信条は強固だ。」が結びつかない。むろん、英語のうちの文も “But we should not discriminate him because of his thought.” のような他の定常文と結びつき、日本語のうちの文も「思想ゆえに彼を差別すべきではない。」のような他の定常文と結びつく。そして、話を単純化するため、これらの文は他の文とは関係を持たないとする。」などの場合には、一方の英語の文をどちらの日本語の文に対応づけたとしても、他の文との関係性を同じ程度に保存するものになる。すなわち、」では翻訳は不確定になるのである。

この例に関しては、他の文との関係を考えれば、なお翻訳は確定するはずだと考えられるかもしない。しかし、現実の言語においては、一つの文はきわめて多くの他の文と関係を持つ。したがって、ある言語のある文と最も近い関係を持つ文を、他の言語において一意的に選び出すことが困難であるということは、それほど不思議なことではないだろうし、より適切な不確定性の実例を考え出す」ともそれほど困難ではないだろう⁽²⁾。

」などで、クワインのいう自国語のひねった翻訳についても考えておこう。クワインによれば、両立する二つの翻訳マニフェルを組み合わせるなど、自国語のひねった翻訳が可能になる (Quine 1960, p. 78)。今の例で言えば、

二つの可能な翻訳マニュアルを組み合わせることで、英語の文 “His belief is firm.” あるいは “His creed is firm.” を介して、「彼の信念は強固だ。」と「彼の信条は強固だ。」といふ二つの日本語の文を対応付けることができる。そして、クワインによれば、同様の手続きをすべての自国語の文に対応付けて行うことによって、自国語の文をそれ自身とは異なる文に、体系的に対応づけることが可能になるのである。しかし、このひねつた翻訳は翻訳として正しく機能しているのだろうか。上の例をみれば、そうでないことを明らかであるように思われる。つまり、もとの日本語では場面文A' とC' に対しては「彼の信念は強固だ。」、「彼の信条は強固だ。」が結びついている。ここで、ひねつた翻訳によれば、ひねつた日本語を話す人の「彼の信念は強固だ。」は、普通の日本語では「彼の信条は強固だ。」に対応するのであるから、ひねつた日本語を話す人の文「彼の信念は強固だ。」は場面文B' とD' に結びつけられているはずである。しかし、ここで考えられていたのはそもそも、普通の日本語を話している人の発話を、ひねつた日本語を話しているかのように翻訳できる、ということであつたのだから、ひねつた日本語を話す人も、結局場面文A' およびC' と定常文「彼の信念は強固だ。」を結びつけていなければならない。したがつて、ひねつた翻訳マニュアルによつては、同音的な翻訳マニュアルと同程度に彼の発話をうまく翻訳することはできないのである。

このことは、翻訳の不確定性が生じるのは、発話傾向の総体が同型的でないときに限られる、ということを示しているように思われる。つまり、自国語のひねつた翻訳マニュアルのようなものを作つたとしても、他の文との結びつきや、刺激との結びつきを全体として保つことはできないのである。逆に、二つの言語が異なる言語であるということの一つの基準が、翻訳の不確定性の成立であるといつてもよいだろう。つまり、もし二つの言語の間で翻訳が完全に確定するならば、それら二つの言語は結局同じ概念をどう表記するかという程度の違いしか持たず、それらはある意味で同じ言語なのである(22)。

五 不確定性の哲学的含意

一般に、翻訳の不確定性は、翻訳を導く「意味」なる客観的事実は存在しないという意味に関する懷疑論をもたらすと考えられているし、それがクワイン自身の考えでもあるように思われる。ここまで考察の結果、自国語と現地語が同型性を持たないときには翻訳の不確定性が成立する可能性があるということが明らかになつたが、このような不確定性は、実際にそのような哲学的帰結をもたらすのであろうか。

翻訳の不確定性が生じるならば、翻訳という場面においては意味の同一性という概念は必ずしも成立しない、あるいは、すべての言語に一樣に適用可能な意味概念なるものは存在しない、ということになるだろう。そしてこのことはクワイン自身も明示的に述べている (Quine 1960, pp. 76-7)。しかし、意味という概念は、翻訳の場面においてのみ働くものではないだろう。ここではまず、エヴァンズによる不確定性テーゼ批判を手がかりにして、翻訳と意味の理論の関係について簡単に考察してみよう。

一般にいつて、意味の理論とは、文の意味がその部分の意味論的な性質にどのように依存しているかを説明するものである。そして、エヴァンズは、クワインの議論が哲学的な重要性を有するのは、それが意味の理論における不確定性を帰結するときだけであると考えている。しかし、エヴァンズによれば、体系的な意味の理論を与えるという観点に立つことで、妥当な翻訳マニュアルは確定することになるのである (Evans 1975)。⁽²³⁾

たとえば、現地人の発話「ガバガイ」の例でいえば、指示の不確定性の例として挙げられたように、それに対しても日本語「ウサギだ」だけでなく、「ウサギフュージョンの一部だ」とか、「ウサギの時空断片だ」といった文を対応づけることが可能である。しかし、「ガバガイ」は他の表現と一緒ににより複雑な文を構成する。たとえば、「ホト

ガバガイ」というような発話が、最初のマニュアルでは「白いウサギだ」に対応づけられるとき、第二のマニュアルでこの文を「白いウサギフュージョンの一部だ」という日本語の文に対応づけるならば、この文は実際の発話とは異なる真理条件を持つことになってしまふ。なぜならば、この翻訳によればウサギフュージョン全体が白くなければならなくなつてしまふからである。あるいは「ウサギフュージョンの白い一部だ」という文に翻訳すればよいと考えられるかもしれないが、この文は茶色いウサギの白い足のようなものにもあてはまるので、やはり真理条件は異なつてしまふ。エヴァンズによれば、このようにして言語の体系性を考慮に入れれば、現地人の発話の体系性を正しく捉えた翻訳マニュアルは一つに確定することになるのである。

エヴァンズは指示の不可測性の事例を用いてこの批判を展開しているが、その妥当性についてはここでは問わない。ここでは次の二点を指摘しておけば十分であろう。まず第一に指摘しておく必要があるのは、エヴァンズの議論は狭義の翻訳の不確定性に関しては同じようには妥当しないということである。前節のような例を考える限り、意味の理論がどのような形を取るにせよ、現地語を対象言語に、自国語をメタ言語にした場合には、不確定性が生じる状況では適切な意味の理論を一つに決定することはできないように思われる。狭義の翻訳の不確定性は、同じ程度に適切な意味の理論が複数存在することを帰結するのである。第二に指摘すべきことは、このような事態がただちに意味の理論にとつて深刻な帰結をもたらすわけではない、ということである。現地語に対する体系的な意味理論を与えるという作業においては、自国語をメタ言語にする事は必然的ではないからである。体系的な意味理論の仕事が、現地語において文の意味がその要素にどのように依存しているかということの理解を与えることである限りでは、現地語そのものをメタ言語とした意味理論が構築できさえすればよいのである²⁴。したがつて、翻訳が不确定であるとしても、ある言語内では適切な意味理論は一義的に定まり、それゆえ意味は十分客観性を持つた概念として機能する、ということができるだろう。

クワインが、翻訳の不確定性が意味概念に対して決定的な打撃を与えるかのように述べていることの理由の一つは、彼が想定している論敵が、意味を心的なイメージないしは抽象的な存在者のようなものとして考え、しかもそれがさまざまな言語に一様に適用可能なものであると考へるような論者であるからではないだろうか。したがつて、意味なる存在者をたてずに、文や語の意味を推論その他における因果的役割として理解し、さらには意味の厳密な同一性という考えも放棄する概念役割意味論のような立場に対し、クワインがなおも批判的な態度をとるのかどうかは明らかではないし、翻訳の不確定性の議論も、そのような立場に対する有効な批判にはなりえないだろう⁽²⁵⁾。概念役割意味論のような形で意味の客觀性を維持するならば、自分には理解できない言語や意味の実在性・客觀性が認められることになるかもしない。しかし、言語の本質は感覚入力に対処するための有益な道具として役立つことにあると考えるクワイン的な立場からすれば、特定の主体による理解の可能性から独立に、言語や意味に自律性を認めるという帰結は、必ずしも不自然なものではないだろう⁽²⁶⁾。

次に、翻訳が不確定であるならば、信念内容の不確定性は帰結するだろうか。クワインが命題的態度のような志向的な心的状態を用いた語り方を嫌うことの一因は、この帰結を認めているからであるように思われる (cf. Hockway 1988, pp. 139-40)。しかし、話はそれほど単純ではない。たしかに、翻訳の不確定性が生じている状況では、自分と異なる言語を話す人の信念内容を、自分の言語で一義的に決定することはできないし、その逆もまた不可能であろう。しかし、同じ言語を話している限り翻訳の不確定性は生じない、という前節の考察からも明らかかなように、自分の信念内容を自分の言語によって一意的に表現することには何の困難もない。つまり、翻訳の不確定性が含意するのは、信念内容を言語に中立的に表現することの不可能性であり、また、言語の意味を言語に中立的に表現することの不可能性なのである。

さらに、このことを認めたとしても、自然言語に中立的な「思考の言語」の可能性が決定的に批判されるわけではない。なぜならば、信念内容は、すべての言語のいわば最大公約数的な構成要素から成り立つ思考の言語によって構成されている、と考えることも可能であるからである。このように考えるならば、ある言語のある文タイプによつて表現される信念は、思考の言語における正準的な表現にしたがつて、さらに信念としてのタイプが分類されることになる。そして、この思考の言語レベルでの内容のタイプ分類にしたがえば、それぞれの言語の話者の信念の同一性も確実に判断できることになるのである⁽²⁷⁾。

もしこのような事態が可能ならば、発話の翻訳自体もまた、その背景にある信念の正準的表現に基づいて確定する可能性が生じてくる。しかし、クワインはこのような可能性を認めないとであろう。なぜならば、上のような可能性を主張する論者は、翻訳を確定させるためには、翻訳に際して言語行動以上の、たとえば脳状態のような事実を証拠として利用する事が必要であるが、クワインはこの前提そのものを拒否するだろうからである⁽²⁸⁾。しかし、いずれにせよ、翻訳の不確定性から帰結することは、信念内容を言語に中立的に表現することの不可能性でしかなく、このことはただちに信念や信念内容の客觀性を否定するわけではないといえるだろう。

さて、以上の考察によつて、次のようなことが明らかになつた。翻訳の不確定性が、二つの言語の発話傾向が同型的でないことに由来するものであるならば、それが現実に成立する可能性は十分にある。しかし他方で、翻訳の不確定性は意味概念の客觀性を完全に無効にするものではなく、不確定性から帰結する意味の懷疑論はきわめて限定されたものでしかない。結局のところ、翻訳の不確定性が示しているのは、翻訳によつてある言語を理解することには限界があり、その言語をより正確に理解するためには、それ自体を習得するしかない、というある意味で平凡な事実なのではないだろうか⁽²⁹⁾⁽³⁰⁾。

注

翻訳の不確定性と意味の懷疑論

- (1) 刺激意味の概念が不當に狭いものであるという批判は、翻訳の不確定性への批判として本質的ではないと思われる。以下で示されるような不確定性は、少なくとも指示の不可測性に關する部分を除けば、刺激意味を世界のある状況のような公共的なものに置き換えたとしても基本的には成り立つと思われるからである。
- (2) 刺激意味を利用すれば、これに加えて「かつ」や「でない」といった論理定項の翻訳や、刺激分析的な文の同定も可能である。ただし、場面文に関しても付帯的情報の違いで刺激意味が正確に一致しなくなる可能性がある (Quine 1960, pp. 37-8)。たとえば、現地人の住む場所にはウサギにたかるウサギバエなる虫がいるために、現地人はウサギの姿が見えなくても「ウサギだ」と発話するかもしれない、そのときには、現地人の「ウサギだ」という文の肯定的刺激意味は我々の刺激意味より広いものになるのである。
- (3) 翻訳の不確定性は指示の不可測性に尽きるものではない、あるいは少なくともクワインはそう考へてゐるということを確認しておることは重要である。クワイン自身も、ガバガイの例を翻訳の不確定性の話として提示したことはミスリーディングであつたと認めており (Quine 1992, pp. 50-1)、指示の不可測性を翻訳の不確定性の典型例であると考えてゐる点で、フックウェイのような議論 (Hookway 1988, chap. 9) は不適切であるといえよう。
- (4) 以下では狭義の不確定性を単に翻訳の不確定性と呼び、指示の不可測性と区別したい。
- (5) 「」とばと対象においては、分析仮説が証拠を越えて進められることがいかにして翻訳の不確定性に至るのかという」との具体的な論証は見られない。指示の不可測性とは異なる翻訳の不確定性の根拠については、後に検討する「上からの議論」に関する議論があるにすぎない。
- (6) 信原幸弘はこのような発話傾向を推論的な発話傾向と呼び、状況相関的な発話傾向と区別しているが、発話も物理的な刺激の一種であることを考えれば、このような傾向性もクワインが本来問題にしている発話傾向の一部であると考えることができるだろう (信原一九九九、第6章)。
- (7) クワインの言い方は、一方の側の発話の傾向性、おそらくは現地人の発話の傾向性だけが問題であるかのような印象を与える。しかし、ここで問題になつてゐるのはあくまでも翻訳なのであるから、マニュアルは現地人と自国人と双方の発話の傾向性に両立するものでなければならないだろう。
- (8) ちなみに、ここで仮に j_1 、 j_2 が物理学に関する文であり、 j_3 、 j_4 が化学に関する文だとするならば、現地語の s_1 が物理学に

関する文であるのか、化学に関する文であるのかどうことは、コミュニケーションから得られる証拠からは判断することができない。クワインの言葉を借りれば、「事の真相がない」のである。

- (9) たとえば宮島一九九二を見よ。なお、「そのような一つの翻訳は真理値において明らかに対立すると考えるかも知れない（Quine 1960, p. 73' 傍点引用者）」という言い方を見れば、クワインも常にこの定義が成り立つとは考えていないと思われる。
- (10) 以上の考察によれば、翻訳が不確定な場合にも、現実には実用性の観点から一つのマニュアルを選択できる、というフックウェイの指摘は、不適切なものである（Hookway 1988, pp. 135-6）。翻訳が不確定なときには、どちらのマニュアルも同じ程度によくコミュニケーションを可能にし、しかもどちらか一方がより簡潔であるということはないのである。
- (11) さらに、クワインによれば、我々が「理論」をどのようなものとみなすかに応じて、決定不全性テーゼが影響を及ぼす範囲が拡大し、それに応じて不確定性が生じる範囲も拡大する」とになる。そしてクワイン自身は言語全体を一つの理論と考えるために、不確定性は言語全体に及ぶことになる（Quine 1970, p. 181）。
- (12) もちろん、文字通りの教科書が存在しなければならないわけではない。いひや必要とされているのは、場面文に基づいて翻訳できる語彙によって、理論語を定義づける文の集合である。
- (13) ところで、燃焼に関する酸素理論とフロギストン理論のようなものを念頭に思い浮かべるべきではない。この場合、経験の全体によりよく合致するのは前者の方であり、後者は我々が偽とみなす文に属することになる。したがって、現地人の燃焼理論を翻訳する際にも、（それが大きな不整合をもたらさない限りにおいて）彼らが真とみなすものを酸素理論と対応づけ、偽とみなすものをフロギストン理論と対応づけるべきであることになる。
- (14) しかし現地人も理論Aを採用しているならば、翻訳は確定することになる。また、両者の採用している理論が異なるとしても、翻訳が常に不確定になるわけではない。
- (15) 経験の違いが言語体系の違いが翻訳を不確定にする、という議論が成り立つならば、同国語を話す者の間でも、ほとんど常に翻訳の不確定性が生じる可能性が存在することになるだろう。
- (16) ここでいう発話の傾向性の同型性とは、言語体系の形式的な同型性であり、あとでいう再解釈の可能性に等しい。これに対して、クワインが翻訳の不確定性の定義で述べている「発話の傾向性の総体と両立する」ということは、あくまでもスムーズな会話を可能にするということであって、我々と現地人の発話傾向の同型性を要請するものではない、ということに注意すべである。

- (17) カークの設定でいえば、ベクテルの批判は、理論が決定不全であつても、二つの翻訳マニュアルを組み合わせることによって、理論Aと理論Bは再解釈が可能な理論にほかならず、両者は単に表記法を異にするに過ぎないことが常に示される、という内容になる。
- (18) すなわち、この場合には単なる表記法の違い以上の理論の決定不全性が成り立っているのである。
- (19) もちろん、実際には、自国語に新たな語彙を導入することによって現地語の理論との同型性を獲得したり、あるいは自国語に現地語の理論体系をまるごと導入するというような形でコミュニケーションの円滑さが維持されるかもしだれ。しかし、このような解決は、現地語の文と自国語の文の対応付けという狭い意味での翻訳の営みからは外れるものである。
- (20) フックウェイが指摘するように(Hookway 1988, p. 172)、これらの不確定性とは別に、翻訳において異なる文を最大にするという基準を優先するか、あるいは文と文の間の整合性を優先するかという選択に由来する不確定性も考えられる。
- (21) このような不確定性理解のもとでは、不確定性の実例は、ある現地語の文を、自国語内の全く異なる二つの文に対応づけることが可能であるというケースではなく、ある程度類似した二つの文に対応づけられるというケースになることに注意すべきである。翻訳の不確定性をめぐる議論が混乱してきたことの一因は、不確定性が前者のようなイメージで捉えられてきたことにあるのではないだろうか。
- (22) もちろん、翻訳の不確定性が生じないもの、すなわち自国語と、生じるもの、すなわち異なる言語という区別は、日常的な自国語と外国語の区別に合致することは限らない。外国語が単なる表記法の異なる体系とみなされることもあるだろうし、自國語の話者が同じ音や文字を用いた外国語の話者として、翻訳を必要とされる場合もあり得るのである。
- (23) ここではフックウェイの記述(Hookway 1988, chap. 9)を参考にして議論を再構成している。
- (24) もちろん、メタ言語にも現地語を用いたような意味理論は、現地語を全く知らない我々が現地語を理解するためには全く役立たない。
- (25) 概念役割意味論に関してはBlock 1986が概観を与えてくれる。
- (26) ただし、概念役割意味論のような立場を考慮していないという点でクワインを批判するのはフェアでないだろう。歴史的な経緯からいえば、クワインやウィトゲンシュタインによって心理主義的な意味概念に徹底的な批判がなされ、言語と意味の客観性ということが強調されたことを受けて現れたのが、概念役割意味論のような理論だからである。(しかも、概念役割意味論は意味の全体論と言語の公共性というクワインの二つの主張をまさに継承しているときえいえるだろう。)

(27) 現実の翻訳においては、英和辞典などを見れば明らかのように、単語と単語は多対多対応の関係にある。その結果文レベルでも、現地語の文章における単語がある意味を持つならば、それは自国語の文句に対応づけられ、その単語が別の意味を持つならば、²² に對応づけられる」というように、文と文の一対一對応は断念されるに至る。現実の翻訳におけるこのような対処法は、自然言語より低いレベルで各言語に共通の意味概念が存在するところを主張を支持するものかも知れない。

(28) わらに、このような論者は、脳状態のような事実が話者の信念を明らかにするところから、自体も前提としているが、この前提が成り立つ保証もない。

(29) 単なる翻訳とは異なる言語の習得には、自国語に新たな語彙を加えるいふいじやうの言語の同型性を達成するとこう仕方で、端的に現地語を学習するという仕方の二つがあるだらう。

(30) 本論文の内容は金杉武司、田中喜之、原哲各氏との議論が多くを負つてゐる。あたし、本論文の草稿に対しては若沢宏和、金糸誠司、田中喜之、恒原邦弘、野矢茂樹名氏に有益な口々へとおどりただいた。三十名氏に感謝した。

文献

- Bechtel, W., 1980, 'Indeterminacy and Underdetermination: Are Quine's Two Theses Consistent?', *Philosophical Studies* 38, pp. 309-20
- Block, N., 1986, 'Advertisement for a Semantics for Psychology', *Midwest Studies in Philosophy* X, pp. 615-78
- Evans, G., 1975, 'Identity and Predication', *The Journal of Philosophy* 72, pp. 343-63
- Kirk, R., 1973, 'Underdetermination of Theory and Indeterminacy of Translation', *The Journal of Philosophy* 72, pp. 343-63
- Hookway, C., 1983, *Quine: language, Experience and Reality*, Stanford: Stanford University Press
- 恒原邦弘「一九九六」、「翻訳の不確実性と主体論」*経済哲研究* 22, pp. 113-25
- 恒原邦弘「一九九六」、「心の現代哲学」*勁草書院*
- Quine, W. V. O., 1960, *Word and Object*, Cambridge MA : MIT Press
- Quine, W. V. O., 1970, 'On the Reasons for Indeterminacy of Translation', *The Journal of Philosophy* 67, pp. 178-83
- Quine, W. V. O., 1975, 'On Empirically Equivalent Systems of the World', *Erkenntnis* 9, pp. 313-28
- Quine, W. V. O., 1992, *Pursuit of Truth (Revised Edition)*, Cambridge MA : Harvard University Press